タイトル	平成 31 年度 一般入試（前期日程） 教育学部美術専攻 芸術・表現系小論文問題（美術）
評価のポイント	1. 提示されたテーマについての考察が、自分の経験や知識・感性に照らし合わせて具体的に行われているか。 2. 提示された対象（作者、作品など）に対する細やかな観察と考察に基づく記述が行われているか。 3. 美術や関連する社会の歴史や現状に関する基礎的な知識についての言及や考察が行われているか。 4. 問題文の指示を守った方法で表記が行われているか。論旨が明快で、誤字 脱字がなく、文章表現に乱れがないか。規定の文字数に対して適切な量の記述を行っているか。
解答例	戦時中の荒野と思われる場所に、一人の青年が立つ。遥か遠くを見つめる眼差し、左手はぎゅっと握られ、何らかの意志が感じられる。音のない静けさとともに、背景の道や建物からは無機質な印象を受ける。青年とは反対に向かう人、荷車、そして犬の存在が、日本が戦争への道を歩む様子を象徴的に表すのだとしたら、この青年は別の方向を見ているのだと感じた。 ふわっと降りた右手には何が持たれるのだろうか。当時の若者の多くは戦地に召集され、好むと好まざるとに関わらず、この手に武器を握ったことだろう。しかしながら、この青年は聴力を失っていることから、その道を外れ別の人生を見据えているかのようである。青年の右手が握るものは絵筆なのだろう。 「立てる像」は画家、松本竣介の代表的な自画像と捉えられている。この時代に静かに抗い、自身の進むべき画家としての道を確固たる意志のもとに歩もうとする竣介。そのような自身の存在を自ら確認する意味においても、この自画像は画家の人生において節目となる重要な作品であるに違いない。 背景の多くを占める空に着目してみよう。やわらかい雲が浮かんでいる。この雲が漂うその先に、竣介の夢見る未来があるのだろうか。戦時中という暗い時代ではあるものの、画家の見つめる未来には、自身が新たな時代（作品）を創り出していこうとする兆しが見えていたのかもしれない。